

高志の国文学館と富山の文学

綿引 香織

高志の国文学館について

高志の国文学館は、富山県立の文学館として、平成24年7月6日に富山市内に開館した。「富山県ゆかりの作家や作品をわかりやすく紹介するふるさと文学の総合窓口」「文学作品のみならず、絵本、映画、漫画、アニメなど幅広い分野の作品を気軽に楽しみ学ぶ機会の提供」「深く探求する・創作する・発表する刺激ともなる場の提供」という三つの基本理念のもと、展示、教育普及、調査研究、収集・保存等の活動をすすめている。

開館後6年が経過した現在、富山の文学との関わりを軸に、これまでの当館の歩みを振り返ってみたい。

展示活動

常設展では、『万葉集』から現代の文学、漫画、アニメ、

映画にいたるまで、富山県にゆかりのある作家や作品の魅力を、ジャンル・時代ともに幅広く紹介している。さらに、郷土の先人や富山大学附属図書館所蔵のヘルン文庫（小泉八雲旧蔵資料）についてもとりあげ、ふるさとの豊かな文学風土の紹介につとめている。

「富山県文学鳥瞰地図」や「ふるさと文学年表」、富山県出身の作家・漫画家の作品を並べる大書架は、富山の文学を概観するための展示である。

『万葉集』の歌人大伴家持が、国守として赴任した越中国で残した多くの歌は、富山県の文学の始まりともいえることから、映像や音声による展示装置や、歌をテーマに描いた絵画など、多彩な手法で紹介している。

近現代の文学者については、横山源之助、筏井竹の門、三島霜川、小寺菊子、前田普羅、田部重治、大井冷光、翁久允、田中冬二、瀧口修造、岩倉政治、高島高、新田次郎、源氏鶏太、啜文兵、角川源義、堀田善衛、佐伯彰一、遠藤和子、柏原兵三、木崎さと子、辺見じゅん、宮本輝などを取り上げて紹介している。

漫画家については、山根青鬼、山根赤鬼、藤子・F・不二雄、藤子不二雄A、まつもと泉、原秀則、花咲アキ

ラを紹介している。漫画やアニメの制作過程がわかる展示装置もある。

また、テーマ展示の形をとっているのが、本県の山にまつわる文学作品をまとめた映像装置「山岳文学物語」、平成29年より新たに設けた「クローズアップコーナー」、企画展の関連資料や当館のコレクションなどを紹介する「特別コレクション室」である。

ヘルン文庫コーナーでは、小泉八雲と、ヘルン文庫を富山に誘致した南日恒太郎を、越中の先人コーナーでは、安田善次郎、浅野総一郎、高峰譲吉など諸分野で活躍した郷土の先人を取りあげて紹介している。

企画展については、年間4〜5回程度、文学、漫画、映画、アニメなどさまざまなテーマで開催している。開館記念展は「大伴家持と越中万葉―風土とこどまする家持の心―」であり、以下、富山ゆかりの作品（『長い道』と『少年時代』、『おおかみこどもの雨と雪』、作家・先人（大伴家持、辺見じゅん、藤子・F・不二雄、久世光彦、田中冬二、林秋路、宮本輝、堀田善衛、棟方志功、里中満智子、株式会社ビーエーワークス、浅野総一郎）、特定のテーマ（立山曼荼羅、おわら風の盆、川の文学、

三禅定の旅、温泉の文学、北陸を舞台にしたミステリー、竹久夢二の旅、竹久夢二と音楽、収蔵資料）に関する企画展を開催。近年は、「上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉」「没後20年 星野道夫の旅」展など、富山ゆかりに限定しない巡回展も行っている。

また、回廊部分では、富山ゆかりの映画の公開に合わせて、映画パネル展なども随時開催している。

教育普及活動

企画展関連講座のほか、定番の文学講座として、県内大学から講師を招く「大学連携シリーズ」、郷土ゆかりの文学者を扱う「ゆかりの文学者シリーズ」、郷土の先人を扱う「巨人の物語をひもとくシリーズ」を開設。その他のイベントとして、「読書感想文サポート講座」「サブカルチャー講座」など児童・生徒向けのもの、「朗読と音楽の夕べ」「ミュージアムコンサート」「文芸サロン」など一般向けのもの、観桜や観月に合わせた季節のイベント、日頃の活動成果を披露していただく「書道パフォーマンス」「高校生による朗読会」などがある。

平成28年度からは、大伴家持生誕1300年記念事業として、県内および首都圏でのシンポジウム、記念式典、県内中学校における出張短歌講座、県内高校における出張万葉集講座などを実施。文学館職員が講師を務める出張講座も実施している。

研究助成制度「高志プロジェクト」

平成25年度から、富山県ゆかりの文学や郷土の研究を行うグループや個人を公募・選考し、奨励金を交付する研究助成制度「高志プロジェクト」を立ち上げた。古典から現代までの富山の文学に関するもの、歴史・民俗に関するもの、伝統工芸に関するものなど、多彩なテーマのもと意欲的な研究がなされている。

文学賞の創設―「大伴家持文学賞」「高志の国詩歌賞」

大伴家持生誕1300年記念事業の一環として、世界の詩人を対象とした「大伴家持文学賞」および富山県ゆかりの若手詩人を対象とした「高志の国詩歌賞」を創設。

第1回は、イギリスの詩人マイケル・ロングリー氏が大伴家持文学賞を、歌人の山田航氏が高志の国詩歌賞を受賞した。

資料の収集・保存・調査研究

このほか通常業務として、ゆかりの文学資料の収集・保存を行っている。収集資料や展示資料について整理し、調査研究を行った成果は、企画展および常設展の内容、展示に合わせて発行する図録やガイドペーパー、『高志の国文学館紀要』、講座等に反映できるよう努めている。

また、ライブラリーコーナーには富山文学に関する本を並べ、自由な閲覧に供している。収蔵資料の閲覧希望に対しては、個別に対応している。

「富山文学の会」と高志の国文学館

「富山文学の会」には、第4回シンポジウム（平成25年3月）および第5回シンポジウム（平成26年3月）で、当館の研修室をご利用いただいている。

一部の会員の方々には、企画展開連講座や文学講座の講師、友の会バスツアーの特別解説員を務めていただき、「高志プロジェクト」へのご応募など、個人の研究成果を当館の活動に還元していただいている。

これからも「富山文学の会」の皆さまのご協力をいただき、地域に根ざす文学館として、共にふるさと文学の発掘・普及に尽力して参りたい。

黒崎真美著

童子と笛の音と富山と

——室生犀星論——

定価二、〇〇〇円＋税

二〇一八年八月二四日 初版発行

龍書房

東京都千代田区飯田橋二、一六、三

〇三、三二八八、四五七〇

・・・愛息豹太郎の死と〈笛の音〉が結びついたとき、犀星の悲嘆と慈愛の根源が見えたような気がした。「童子と笛の音」は、犀星の慈愛の分析となった。

（「あとがき」より）